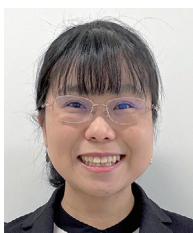


仕事と私事のリーダー



櫻木美菜

崇城大学工学部ナノサイエンス学科
[860-0082] 熊本市西区池田4-22-1
博士(工学), 准教授.
専門は超分子化学, X線散乱.
d08b0101@nano.sojo-u.ac.jp
<https://sites.google.com/view/mina-sakuragi/>

学生時代に携わったドラッグデリバリーキャリアの研究テーマや、兵庫県の大型放射光施設SPring-8、学会でいろいろなどところに行けることが魅力的だったことから、研究者の道を選んだ。2015年までは自分が好きなことを好き放題やっていたが、2015年11月から母親になり、2019年4月から研究室を独立して運営するようになり、私事と仕事の両方において、これまで苦手としていたリーダー的役割を担うようになった。この原稿では、リーダー初心者として実施していること・感じていることを述べたい。

2013~2018年度まで、崇城大学の草壁克己先生の研究室で助教として勤務していた。机も学生の隣りにあり、私はみんなの先輩のような気持ちでノー天気な教員だった。しかし、2019年度から研究室を独立して運営するようになって、研究室の学生を育てる立場の指導教員として一気に責任を感じた。初めて配属される研究室で経験したことは、結構その後の人生に影響するし、記憶に強烈に残ると思う。学生がどのように成長するのか、研究を楽しめるのかどうか、指導教員の影響はとても大きいし、学生にいろいろな経験を積んでもらうため、研究を深く掘り下げたりテーマを拡大したりするためには、研究成果を残して予算を毎年確実に獲得したい。

学部の頃、北九州市立大学の櫻井和朗先生の研究室で、初めて検討会に参加したとき、自分より一つ年上の先輩達が、訳のわからない用語ばかりの会話をしていた、目が点になった。自分も1年間頑張ったら、もしかするとこの会話の中に入れるのかもしれない、とワクワクしたのを覚えている。卒論発表のスライドを、試行錯誤して作成し「よし完璧!」と思って先生に見せたら、ほとんど訂正された。私のサンプルはこんな構造です、とTEM像のデータを週報で発表したら、「これゴミやで」と言われた。英会話が最大の苦手、一生日本からは出ないつもりでいたのに、研究者になるなら必ず留学をきなさい、と櫻井先生に無理矢理イギリスに3カ月間渡航させられた。しかし、イギリスに着いたその日から、世界の広さに圧倒され一気に視野が広がるとともに、英語アレルギーが完治した。櫻井

研究室で過ごした6年間は本当に衝撃的で、人生が100倍楽しくなった。せっかくなら、私達の研究を面白いと思って選んでくれた今の研究室の学生にも、衝撃的な経験や、目標を達成する喜びを経験してもらい、濃い数年間を過ごしてほしい。現在所属している崇城大学は修士進学者が1~2割程度で、研究室に修士の学生が少ない。そのため、学部で配属されたときに、私がかつて経験した宇宙語のような先輩達の研究のディスカッションを聞いて、衝撃を受ける機会も少ないと思われる。しかし、アットホームな雰囲気と教員と学生一人一人とのディスカッションの機会は設けやすいと思う。研究は、一人黙々とするより、しゃべっているときや会話中に相手から質問されたときに、アイデアが沸いたり気が付いたりすることも多いように思うので、検討会のような緊張した場面だけではなく、リラックスした状態で学生になるべく多くのことをしゃべってもらうよう心がけている。いろいろな学生がいるので、多くを語らない学生がいたとしても、どれだけ相手の言葉を引き出せるのか試行錯誤しているところである。みんなが心から研究生活を楽しんで成長できる、活発な研究グループを目指し、一丸となって現在の研究分野に貢献したい。

私事では、ほとんど100%に近いくらい6歳の息子‘はるくん’が頭にある。はるくんは、繊細だが自由奔放でいたずらっ子で、暇さえあればソファでジャンプしている元気な男の子だが、新しいことに挑戦しない傾向だ。たとえば、仲良しの子が自転車で隣りをスイスイ走っていても、はるくんはまったく興味なし。こんなにも奥手で、将来は大丈夫だろうか心配しているところだが、子供の頃一輪車、鉄棒の新技、竹馬で学校から家まで帰るなどいろいろな独自の目標を立て挑戦して、積極的だと思っていた私自身も、よくよく振り返ってみると、上述したように「英会話」を避け続けていたことはすごく奥手だったと思う。息子には、これからいろいろな人と出会う中で、衝撃的な体験をして、人生を精一杯楽しんでほしいと思う。私はそのきっかけ作りを応援する、はるくんファンクラブのリーダー1号である。